

平成 25 年 9 月 1 日

食育の観点よりすくすくスクールにおいて補食再開を求める陳情

陳情者

江戸川区では平成 25 年度よりすくすくスクールの学童登録児童への保育の補食事業がなくなりました。すくすくスクールは、健全育成事業と学童保育事業の合体として、教育・福祉双方の課題検討を経て、平成 14 年に教育委員会・児童福祉担当の子ども家庭部の共同プロジェクトとして発足し「子供達のために江戸川区独自のよいものを世界に先駆けて作ろう！大人の事情はすべて取り除こう！」という理念の下に築き上げられた事業で、学校敷地内に設置されていることも画期的な取り組みであると存じます。学校施設は地域のもの、公共施設であるということが再確認されます。江戸川区のホームページにある「第一法規 生涯学習情報ファイルに掲載されているすくすくスクールの事業紹介」(2009年3月1日)では、学校教育が終了している時間、学校の使用できるすべての場所をすくすくスクールとの連携によって子どもが過ごしやすい場所として作り出すことを提供していると書かれています。例えば、料理教室を行うために家庭科室を使用したり、音楽をやるために音楽室を使用したり、プールなどの施設活用も自然に行われており、地域の協力者により卓球、スポーツチャンバラ、剣道、タグラグビー、合唱、習字、そろばん、ミュージックベル、手芸など多様な倶楽部活動も行われているとのこと。地域と学校が一体化し、放課後を親の就労に関わらず、同じ時間を専門職に限らず、地域ボランティアや地域功労者の方々と過ごす地域活動の一つとして位置づけられていることが伺えます。

しかし、平成 25 年度より「放課後の学びや遊びの時間を途切れさせずに確保すること」を重要とすること、「利用者が少ないこと」等を理由に補食が廃止されました。果たして補食を食べる時間は子供達の学びや遊びを中断させるものなのでしょうか。食育の観点からしても、子どもの胃袋は大人に比べてまだ小さいため、3食では食べきれないことにより、おやつはただ甘いものの補給ではなく、一日の食事のうち「4回目の食事」との位置づけもあります。自分の体が、どのくらい食べられるのか？おなかのすいたときに何を食べるべきなのか？自分の体が欲しているものを知り、必要な栄養素を体に取り入れるという「食育」、それらを身につけられるのも江戸川区すくすくスクールならではのようです。

学校の施設が使えるのであれば、理想のおやつを考え、みんなで作って食すというのも食育となりうるチャンスなのではないでしょうか。みんなで食べるおやつは一人で食べるそれよりもおいしいと思います。「孤食」という言葉が生まれる現在、手作りおやつを仲間と一緒に食べる機会があれば、心もやすらぐのではないのでしょうか。すくすくスクールは子ども達が集まれる自由な空間であり、自分達の場所だから自分達の責任で自分達で考えて活動できる場所であると思います。もちろん、帰宅時間は各自異なり、おやつを必要としない子もいると思います。食べる子と食べない子の対応、費用、衛生の面より問題点は多々あると存じます。しかし、補食が無くなったことで一番負荷のかかると思われる最終時間まで残っている児童の身体を最大限に配慮し、補食を必要とする年齢に応じて、栄養素が不足する事態がないように、補食制度を再構築していけないのでしょうか。補食提供が指導員の過剰負担になる場合、江戸川区の地域力、ボランティアの力を借りるという可能性もあるのではないのでしょうか。

「すくすくスクールの根本にあるのは、大人の利害を取り除き、“子どもたちのために”という一点で考える」「人間教育の場として地域・学校・家庭それぞれ単独ではできない教育を行っている」つまりは、学校教育と放課後事業の人間教育の二つの柱によって責任と社会性をはぐくんだ子ども達は人として大きく成長し、未来を担ってくれると確信していると前述文書において、江戸川区教育委員会は結んでいます。大人の利害を取り除き、将来を担う子供たちのために補食のあり方を再度検討し、再開できるよう陳情いたします。